



第85回

空に一番近い所で、一番の眺めを見たい プロの空師として 生きていく

空師へのきっかけ

こんな自分でも空師として特殊伐採をしている。誰かの励みにでもなればと何も飾らず、自分の経歴を赤裸々に語りたいと思う。

空師として秋田県潟上市を拠点に活動中。生まれも育ちもこの街だ。県内の工業高校自動車科を卒業後、なぜかクリーニング屋に就職し1年3カ月勤めた後、ニートになった。すぐに求職活動をする気力もなく時間だけが過ぎるダラダラした生活。

付けと雑用ばかりで、チェーンソーで伐採なんてやらせてもらえず、下仕事の毎日。4年半たった頃、ようやくメインで仕事をさせてもらい、ひたすら自分の技術を磨いた。仕事を始めて5年が経ち、親方から「田仲も一人前だ!」と言われた(何とか、自分も職人になったことを実感できた)。そして、親方の引退。

「最後の弟子として田仲は独立しろ!」。

何をするにも中途半端だった自分を叩き直してくれた親方の言葉で自分の覚悟が決まった。しかしながら「独立!」かつこい!というこゝよりも不安の方が大きい。普通の「伐採屋」は、そこら中にいるはず。起業しても、自分に仕事なんて来ないだろう。その時、親方の言葉がよぎった。「他の人がやってないこと、誰もやれないことをやれ。人の一歩も二歩も三歩も先を読め」。

その一方で、当時流行っていた車いじりで数百万円も借金を抱えてしまい、焦りも感じていた。ニートになってしばらくした頃、友達から「木を伐る仕事やらない?」との電話。木を伐る=林業?、「きつかけ」か「与作」か? 現場作業といえば、ガラが悪くて怖くて汚くて大変そう...そんなイメージしかなかった。それでも切羽詰まっていたので、金髪を黒く染めたものの、爆音が鳴る車高の低い車に乗り、Tシャツに半ズボン姿で面接に挑んだ(今思えば、本当にふ

その言葉に四六時中頭を悩ませ、辿り着いた答えが「空師」。

空師の修行

空師を仕事として自分がやっているか、全く自信がなかったが、秋田県は高齢化、人口減少が進んでおり、木に興味を持っている若者は少ない。樹木は常に人々と共存し、どこにでもあるから逆に目につけないし、気にも留めていない。世代がかわり街の変化とともに、樹木はどんどん大きくなって管理できなくなっている。「他の人がやってないこと、誰もやれないこと」はまさにこれだ。

伐採の技術は親方や兄弟子を見て覚えたが、空師・特殊伐採の技術はなかった。自分に足りないものは、木に登る技術とロープワーク。まずは、木に登る練習をした。平日は仕事が終わってから、土日は朝から木登りの日々。登っては降りてを何度

ざけている)。そんな自分に親方は「明日から来い!」この出会いが、今の自分をつくる「きつかけ」となった。

がむしゃらに働き、技術を磨く

初めての現場仕事。電力会社の協力会社として電線の支障木伐採がメインの職場であり、親方と兄弟子2人、そして、スギとマツの違いすら分からないくらい木に興味がない素人の自分。借金もあったので、がむしゃらに仕事に取り組み、とにかく働いた。最初の3年は伐採後の片

も繰り返したことで木登りの技術が身に付いた。次に樹上での伐採技術習得に挑んだ。こまめに買い揃えていた道具を愛車に全部積み込み、週末は飛び込み営業。

「今度、伐採屋で独立する者ですが、無料で木を伐らせてもらえますか?」。名刺もなく、柄のTシャツに作業ズボン。看板や信用もない20代後半の若者を誰も相手なんかしてくれなかった。そんな中でも木を伐らせてくれる人がいて、樹上の伐採技術を磨いた。「頑張つてね!」「応援してるよ!」その言葉が独立への心の支えとなった。こうして通常の伐採技術以外は全て独学で身につけた。そして5年間、技術の習得に励み、ついに独立を決意した。親方から会社を引き継ぎ社長になった兄弟子に独立の旨を話す。「頑張れよ!」と快く承諾してもらった。また、そのころ知り合った秋田県林業研究研

田仲直也

ツリーケアサービス 代表
(秋田樹木管理研究会 会長)
(秋田県潟上市)

修センターの職員から特殊伐採技術や起業のアドバイスをもらい、がぜん「開業」のやる気が何倍もできてきた。今でも公私にわたりお世話になっている（一生、その人の存在は忘れることはない）。

そして、「ツリーケアサービス」の開業

嫁さんと娘と息子、新築の住宅ローンを抱え4人家族の大黒柱として平成31年4月に屋号「ツリーケアサービス」を開業する。直ぐに仕事なんてこないだろうから、朝から夜中までバイトを掛け持ちして、体がぶっ壊れても死ぬ気で家族に飯を喰わせていく覚悟で始めた。

いざ開業してみると、無料で伐採させてもらったお客様からの口コミやホームページなどから、仕事がどんどん舞い込んできた（こんなに木に困っている人がいることにも驚い

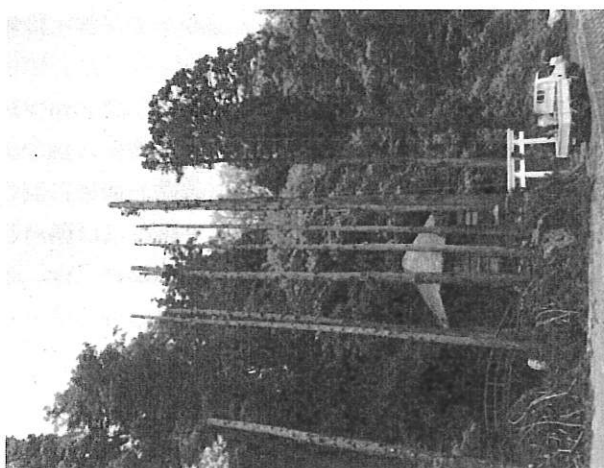
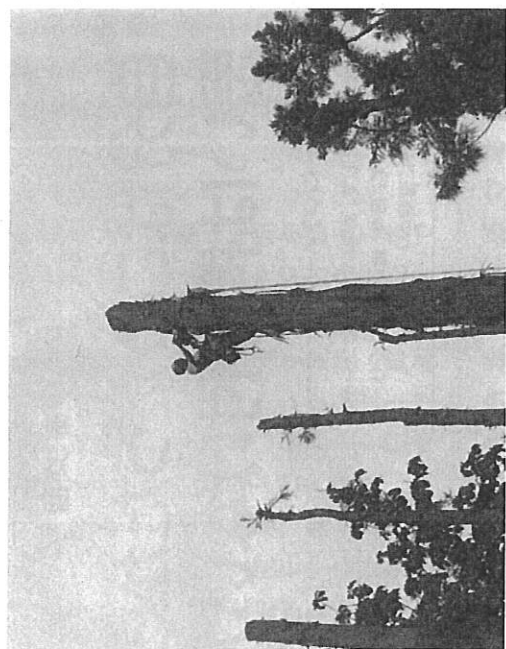
た。ただ、簡単な現場はひとつもない。何故なら誰にでもできる所は、誰かが先に手がけており、自分に依頼が来るのは他の業者に断られたり、手に負えない難易度の高い木ばかりだ。

まわりから、「木に登って怖くないの？」といつも聞かれるが、正直に「怖いんですけど、達成感があるからやってみます！」とかつこつけない。上手い素振りはないと常に自分に言い聞かせている。現場で仕事をしていると常に観客が集まってくる。見られるとかつこついたり上手い素振りをしがちだが、そこに落とし穴がある。安全第一で終わることが「プロ」でありかつこい。独立前に無料で木を伐った現場で枝が跳ね返り波板の壁に穴を開けてしまったことがある。そんな経験が今の糧になっている。もう失敗はしない。日数が掛かる現場はキリの良い所で切り上げる。

集中力が欠けるとケガに繋がる。100%の安全作業、リスクを減らして事故0%。特殊伐採の専門講習も受講し、技術を常に磨いている。

仕事はいたって順調。県内のラジオ、新聞、テレビに取り上げてもらったり、若い林業技術者の方々に自分の経験を話す機会を得たり、県内の樹木医と「秋田樹木管理研究会」を立ち上げ、樹木管理と特殊伐採の安全技術の普及にも取り組んでいる。その活動については東北森林管理局主催の森林・林業技術交流発表会で発表し、日本森林技術協会理事長賞を受賞することができた。

仕事を通して、人々の「木」への想いも見えてきた。「数十年前の台風で曲がったんだよ」「大昔に火事で幹に穴があいたらしい」「子供が生まれた時の記念樹なの」「伐採した後に「今まで、ありがとう」と涙を流すお客様もあり、そのような木を伐採させ



依頼が来るのは難易度の高い木ばかり。安全第一で終わることが「プロ」でありかつこい

悟を決め樹上で伐採する。秋田県から東北、全国へと立ち向かいたい。その中でいずれは弟子を持ち尊敬する親方のように立派な職人を育て、一人

ていただくことに「感謝」の気持ちしかない。

運も実力、男は度胸、覚悟

人口減少、少子高齢化、コロナ禍、この先どうなるかは誰も分からない

が、それでも時代の三歩も先を読み続けることが必要だ。それと同時に、今はただひたすらにがむしやに現場人として木に登る覚悟だ。「木」は生き物で同じものは全くない。同じ木は存在しない。経験が全て、それが実力となる。

親方の言葉であるが、「運も実力、男は度胸、覚悟」。運を味方につけ、度胸でどんな高い木でも登って、覚

悟として次世代へ「空師」を継いでいきたい。

順調の中にもケガやトラブルなどのリスクはつきもの。うまくはいかないことも肝に銘じている。もし、どん底に落ちても常に前向きでいればなんとかなる。どん底からでも這い上がって、いずれは空に一番近い所で一番の眺めを「空師」として見たい。